

DATA FILE



斜方晶系

名前	WAVELLITE (ウェーベライト) / 銀星石
化学組成	$\text{Al}_3(\text{PO}_4)_2(\text{OH}, \text{F})_3 \cdot 5\text{H}_2\text{O}$
色	無色、白色、黄色、黄緑色など
光沢	ガラス光沢、樹脂光沢、真珠光沢
蛍光	なし
条痕	白色
劈開	完全
断面	不規則
硬度	3.5 ~ 4
比重	2.4

ぎん せい せき

銀星石

WAVELLITE

ガラス光沢、樹脂光沢、真珠光沢を持ち、素焼きの陶板にこすりつけると白色の条痕が残る。

アメリカのアーカンソー州で産した銀星石の結晶。

劈開は完全で、ハンマーでたたくと不規則な断口を示す。

主に燐灰石が変化してできる二次鉱物として産する。

炎の中に入れても溶けないが、試験管の中で加熱すると水を放出するのが特徴。

共生鉱物には、燐灰石、石英、針鉄鉱、バリシア石などがある。

微小な結晶が集まって半球状や球状になることが多いが、板状、柱状、繊維状でもあらわれる。

リン酸塩鉱物

▶球状結晶の集合体で産した銀星石。アメリカのアーカンソー州産。



キ 銀星石

リン酸肥料の原料

主に燐灰石の二次鉱物として生成する銀星石は、スレートの間の節理や内部の空洞内に多く見られるほか、褐鉄鉱を含む鉱石や堆積性燐灰石鉱床中に生じることもある。銀星石に含まれている非金属元素のリンは、あらゆる生物の発育に不可欠な存在。そのため、大量に産する鉱床では、銀星石はリン酸肥料の原料として産業用に採掘されている。

和名の由来は「打上げ花火」

鉱物名から銀色の結晶をイメージされそうな銀星石だが、実際には無色、白色、黄色、黄緑色などで産出。標本として日本に入ってきた当時は、無色透明の針状結晶が放射状に集合しているものが多く、その外見が打上げ花火のように見えたため、



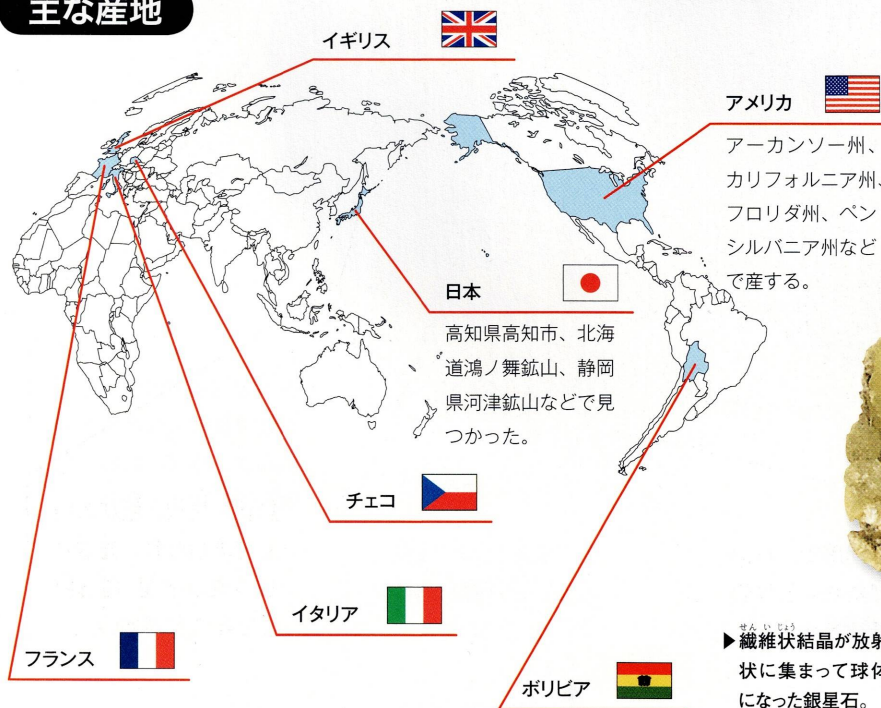
▲高知県高知市豊田で産出した銀星石。

「銀星石」という和名がつけられたという。日本での産出量は少ないが、高知県高知市などではチャートの隙間に見られるほか、北海道の鴻ノ舞鉱山や静岡県の河津鉱山などの鉱脈の隙間からも見つかっている。ちなみに、英名の「ウェーベライト」は、イギリスのデボン州で初めてこの鉱物を発見したイギリス人医師ウィリアム・ウェーベルにちなんで名づけられた。

汚れを取り除く方法

銀星石の結晶はやわらかくてこわれやすいため、表面についた汚れを取り除く場合には超音波装置を利用する。その際は、酸に溶けやすいため、蒸留水の使用が不可欠。また、カメラのレンズを掃除するブローアなどでホコリを吹き飛ばすのも有効だ。

主な産地



▶繊維状結晶が放射状に集まって球体になった銀星石。